



メルボルンで過ごした一年

東京理科大学 創域理工学部 建築学科 准教授 ^{にし だ おさむ} 西田 司

MELBOURNE



滞在地 オーストラリア／メルボルン

在外先 The University of Melbourne

滞在期間 2025年4月1日～
2026年3月31日



メルボルンで一年間の在外研究を行う機会をいただいた。メルボルン大学には、それ以前にもワークショップやレクチャーなどで何度か訪れたことがあり、そのたびに、大学と都市との距離の近さや、街の中に人々が滞在する場所が多いことに興味を持っていた。そこで今回の在外研究では、メルボルン大学に共同研究を打診し、「プレイスメイキング」をテーマに、都

市の中にある小さな余白や、人々の滞在や交流を生み出す空間の仕組みを調べることにした。

路地や広場、水辺、公園、図書館、屋上。都市の中には、建築の用途や敷地の境界だけでは説明できない場所が数多く存在している。そうした場所がどのように使われ、どのような空間的条件が人々の滞在を生み出しているのか。それを実際に暮らしながら観察し、記録することが研究の出発点だった。

都市の魅力は、立派な建築や壮大な広場だけでは決まらない。誰がそこにいて、どのように過ごし、誰と会話し、どんな時間が流れているのか。空間をつくる制度や設計と、そこを使う人々の日常的な営みが重なることで、都市の風景は少しずつつくられていく。そのことを、メルボルンでの一年間の暮らしは教えてくれた。

メルボルンは、オーストラリア南東部に位置する都市である。世界の「住みやすい都市ランキング」でたびたび上位に挙げられ、建築や都市デザインの分野でも評価が高い。グリッド状の街路、歴史建築と高層建築の共存、街中を走るトラム、豊富な公園や水辺空間。都市として整っていることは確かだが、実際に暮らしてみても感じた魅力は、そうした制度や施設の充実だけでは説明できなかった。

街を歩いていると、とにかく人々がよく立ち止まっている。路地の小さなテーブルでコーヒーを飲む人。公園の芝生に寝転がる人。川沿いの階段に座って昼食をとる人。図書館で仕事をする人。屋上で夕方から長い時間を過ごす人。何か特別なイベントがあるわけではない。都市の日常の中に、立ち止まり、座り、長居する場所が数多く存在していた。

私は今回の研究を「Made in Localscape」と名付けた。都市を完成された形として捉えるのではなく、地域固有の空間や環境、制度、文化、そして人々の営みによって、風景がつくられ続ける状態として読み解





こうとする試みである。そのため、研究では有名な建築を訪ねるだけでなく、都市空間を歩き回り、人々の居場所を観察することに多くの時間を使った。

路地に椅子やテーブルがしみ出していれば、その寸法を測る。ベンチを見つけると、どのくらいの人が、どのくらいの時間座っているのかを見る。人はどこで立ち止まるのか。日向と日陰のどちらを選ぶのか。昼と夜で使われ方はどう変化するのか。植木鉢や小さな庭は誰が作り、誰が管理しているのか。そんな、一見すると些細なことを記録し続けた。

調査の中心となったのは、市内中心部のレーンウェイと呼ばれる細い路地である。メルボルンには無数のレーンウェイが存在する。もともとは荷物の搬入やゴミの回収など、都市の裏側を支えるサービス空間としてつくられた場所だ。しかし現在では、カフェ、バー、小さな店舗、ストリートアート、テラス席などが入り込み、メルボルンを象徴する都市空間の一つになっている。

最初に驚いたのは、その「滞在の密度」だった。幅数メートルほどの細い路地に椅子やテーブルが並び、人々が立ち止まり、会話し、食事をし、仕事をし、ときには何もせずに時間を過ごしている。日本では人通りの少ない路地は避けられたり、建物の裏側として扱われたりすることも多い。しかしメルボルンでは、路地そのものが目的地になっていた。

さらに興味深かったのは、その滞在を生み出している要素が、驚くほど小さいことだった。椅子の向きが少し変わる。植木鉢が置かれる。壁にもたれられる。段差が座面になる。庇によって小さな日陰ができる。店舗の内部から椅子やテーブルが路地へ少しだけしみ出す。普段、設計図を描いていると、つい大きな構成

やコンセプトに目が向きがちだ。しかし現実の都市では、身体感覚に近いスケールの小さな調整が、人の行動を大きく変えていた。

そのことを確かめるため、店舗などに許可を得ながら、写真撮影や実測調査も行った。路地幅を測る。椅子やテーブルの寸法を測る。段差の高さを測る。人がどこを歩き、どこで立ち止まるのかを記録する。時間を変えて同じ場所を訪れ、使われ方の変化を見る。街を歩き、立ち止まり、人々と同じ場所で時間を過ごし、都市を身体的に読み解いていくフィールドワークだった。

調査するために街へ出て、街にいる人と話し、そこから新しい場所を知り、また歩き始める。研究している対象と研究している自分の境界が、少しずつ曖昧になっていった。都市計画や建築、行政の制度が場所の基盤をつくり、店舗や地域の人々が運営し、そこを訪れる人々が日々使い続ける。その多様な関わりの積み重ねによって、都市は育っていく。

研究の対象は、路地から次第に都市全体へ広がっていった。ヤラ川沿いでは、期間限定の飲食空間や仮設的な施設が現れ、人々が座り、寝転び、食事をし、景色を眺めている。完成された公共空間をつくって終わるのではなく、季節や時間に応じて使い方を変えながら、水辺が更新され続けていることが興味深かった。

視線を上に向けると、屋上もまた都市生活の舞台になっていた。レストランやバーだけでなく、ガーデン、ワークスペース、屋外学習の場所、映画上映など、多様な活動が展開されている。路地によって都市生活が水平方向に広がり、屋上によって垂直方向にも広がっていく。メルボルンでは、都市生活が地上だけで完結していなかった。



図書館や大学などの公共施設も印象的だった。図書館には、本を読む場所だけでなく、卓球台やイベントスペース、工作や制作のためのスペース、仕事場、子どもの遊び場などがある。異なる年齢や目的を持つ人々が、同じ建物の中

でそれぞれの時間を過ごしている。重要なのは、高価な設備や巨大な投資だけではなく、「ここにいていい」と感じられる場所をつくることなのだと思う。誰かが座っていると、別の誰かも座り始める。誰かが活動を始めると、それを見た人が参加する。そうして人の存在が次の人の滞在を誘い、都市の風景が更新されていく。

研究の拠点となったメルボルン大学での時間も、大きな刺激となった。滞在中には、設計スタジオや講評会に多く参加した。スタジオでは、敷地に対して建築を提案するだけではなく、歴史や社会、環境、コミュニティなどの背景を丁寧にリサーチし、そこから建築の役割そのものを問い直す課題が多い。

学生たちは図面や模型をつくるだけでなく、都市を歩き、既存の建物や風景を読み解き、時には現地で地元の人々の話を聞きながら、自ら設計の問いを立てていく。印象的だったのは、最終的な形の完成度だけではなく、何を発見し、どのような問いを立て、リサーチと設計を往復しながら提案に至ったのかというプロセスが重視されていたことである。

教員と学生の議論も活発だった。講評会は、作品の優劣を評価する場というより、一つの提案を起点に、建築や都市について考えを深める場になっていた。学生の発表に対して教員が問いを投げかけ、別の学生が

議論に参加し、ときにはゲストとして参加した建築家や研究者が異なる視点を提示する。設計案を完成させることよりも、その設計を通して新しい問いを発見することが大切にされているように感じた。日本で設計教育に携わる自分にとっても、設計とは答えを出すことだけではなく、まだ見えていない問いを発見することなのだと改めて考える機会となった。

学期末には、学生たちのスタジオ成果を一堂に展示する「MSDx」が開催される。メルボルン・スクール・オブ・デザインの建物全体が展示空間となり、設計スタジオや修士設計をはじめ、建築、ランドスケープ、都市デザインなど、多様な分野の模型や図面、映像が並ぶ。吹き抜けや廊下、スタジオなど、普段学生たちが学んでいる空間が展示会場へと変わり、あちこちで作品を前にした会話や議論が始まる。

印象的だったのは、成果を単に評価のために提出して終えるのではなく、互いの作品を見て議論し、大学の外にもひらく機会として位置づけられていることだった。同じ時期には、モナッシュ大学やRMITでも学生作品の展覧会が開催される。学生や教員、建築家たちは大学の垣根を越えて互いの展示を訪れ、作品を見ながら議論する。私自身もそれぞれの大学の展示や講評会を訪れたが、大学ごとの教育方針や設計へのアプローチの違いを見ることができ、とても刺激的だった。

街の中に複数の建築学校が集まるメルボルンでは、学期末になると都市全体が一つの大きな建築展のような雰囲気になる。スタジオでのリサーチと設計、講評会での議論、成果の展示、そして大学を越えた交流までが連続している。建築教育が大学の中だけで完結するのではなく、都市の建築文化の一部になっていることに、メルボルンの建築教育の豊かさを感じた。

研究生生活は、もちろん研究だけではない。友人と路地にあるレストランに行き、家族とマーケットで買い物をし、カフェで朝を過ごし、トラムに揺られて大学へ通う。休日には公園や海辺へ出かけ、特に目的もなく街を歩いた。こうした何気ない時間も、今振り返ると研究とつながっていたように思う。

公園に行くと、大人も自然に芝生に座っている。子どもが遊ぶ横で本を読む人がいる。友人同士で食事を持ち寄り人がいる。カフェでは長時間いても急かされない。大学の中庭や屋上にも、いつも誰かがいる。メルボルンで暮らしていると、都市には「何かをするための場所」だけでなく、「特に何もしなくてもいい場所」が数多く存在していることに気づく。都市の豊か





さとは、どれだけ多くの場所で「何もしない時間」が許されているかということなのかもしれない。

夏休みには、家族でキャンピングカーを借りて旅に出た。向かったのは、野生のコアラが数多く生息するレイモンド島である。島を歩くと、ユーカリの木の上にコアラがいる。最初は一頭見つけるたびに立ち止まって写真を撮っていたが、そのうち次々と見付き、滞在中には五十頭を超えるコアラを見ることができた。キャンピングカーで移動し、自然の中で食事をし、その日の風景を見ながら次の場所へ向かう。都市を調査する日常とはまったく違う時間だったが、オーストラリアの都市生活が、広大な自然環境と近接していることを実感する経験でもあった。

週末には、郊外の自然豊かな地域に暮らす知人の家を訪ねることもあった。広い庭や自然の中で過ごし、夕方になるとバーベキューが始まる。オーストラリアでは、休日に友人や家族を自宅に招き、バーベキューをしながら長い時間を過ごすことが珍しくない。食事をし、話をし、子どもたちが遊び、日が暮れるまで同じ場所で時間を過ごす。都市の路地や公園で感じた「滞在することの豊かさ」は、こうした生活文化の中にもつながっているように思えた。

研究と生活は、最初は別のものだと思っていた。大学へ行き、街を調査し、研究をする時間。そして家族や友人と過ごす時間。しかし一年間暮らしてみると、その境界は次第に曖昧になっていった。街を歩くことが研究になり、カフェで過ごす時間が観察になり、友人との会話から新しい場所を知る。研究するために暮らしていたはずが、暮らすことそのものが研究になっていた。

一年間の滞在を終えて帰国すると、日本の街も少し違って見えるようになった。日本には繊細な空間設計

があり、美しい街並みがあり、丁寧な管理や運営がある。一方で、使い方や滞在に対して、少し慎重すぎる場面もある。座ってはいけない場所、飲食してはいけない場所、活動を始めるために多くの許可が必要な場所。安全や管理を重視するあまり、人々が自由に関われる余地が少なくなっている空間もある。

メルボルンで見たのは、都市を完成させることよりも、人々が関わり続けられる状態をつくることだった。都市の余白とは、誰かが使い方を発見できる可能性のことである。

今回の在外研究を通して、都市を見る目が変わった。完成した建築を見るのではなく、その周りで人がどのように過ごしているのかを見るようになった。誰が座っているのか。どのくらい滞在しているのか。どんな会話が生まれているのか。そこに新しい人が参加できる余地があるのか。建築や都市は、完成した瞬間に価値が決まるものではない。人々に使われ、時間を重ね、ときには使い方を変えながら、少しずつ場所になっていく。

そして、この視点はこれからの設計だけでなく、大学での教育にもつながっていくと思う。学生たちと敷地を調査するとき、何を建てるかを考える前に、そこで何が起きているのかを見る。人々がどこを歩き、どこで立ち止まり、どんな時間を過ごしているのかを観察する。完成された答えを提示するのではなく、その場所にある可能性を発見する。

メルボルンで経験した研究と教育、そして日々の暮らしは、建築をつくる前に、まず場所をよく見ることの大切さを改めて教えてくれた。都市の余白は、まだ使い切れていない。そして、その余白を誰かが発見し、使い始めるところから、新しい都市の風景が生まれていくのだと思う。